セ×425

162
711

基督教叢書

ヘンリー、ドラムモンド原著

安心立命

全

東京
南海堂發行

#29
768

書

愛心立命

全

ヘンリー・ドラムモンド原著

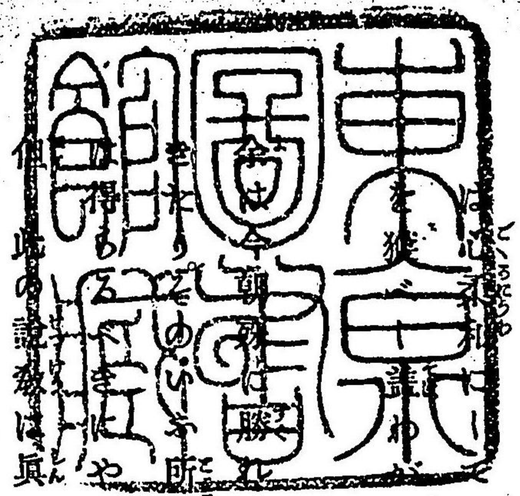
東京

南海堂發行

ヘンリー、ドラムモンド

凡て勞たる者また重を負る者は我に來れ我なんぢらを息ません我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負て我に學なんぢら心に平安を得べし蓋我軛は易わが荷は輕ければ也

馬太傳十一章廿八―三十



たる說教者が安心と云へるとにつきて、述ぶるを聞は美はしき思想にて充ち居たれど、如何にして安心とは何ぞやとの問を發すれば、彼の說教中、何の答もなきが如し。但此の說教は眞に着實を主とするものと見へたれど、余が心に明かに知らるべき經驗を示さず、また余が容易く悟り得べき訓諭をも與へざりしなり。即ち其の午後、余が此の活世界に出づるに方り安心なる

ものを如何に去て得べきかと云へる問題に對しては、少しも其の方針を示さざりしなり。

されど此の尤も大切なる條件を欠きたるは、獨り此の説教者のみの過ちにはあらず。すべて世俗の宗教は、皆此の點にれいて五里霧中に彷徨ふものなり。是等宗教家に向つて安心の道を尋ね、心の惱みを愈すべき療法を求むれば、彼等は遲疑躊躇してその方針を曖昧に歸せしめんとす。

宗教家の常に唱ふる壯大なる言と、その日常の生活との間に一致の全からざるとは、大に我等を惑はし、その志を挫折せりと云はざるべからず。基督教は國語に於ける尤も高尚なる言を有し、その文字は人の靈魂に入るとを得べき、尤も偉大なる、尤も幸福なる感覺を代表すべき言を以て溢れたり。安心、喜樂、平和、信仰、愛、光等――是等の語は讃美の歌にも祈禱の言にも見へざるとなきが故に、傍觀者は是れ實に基督教徒の實驗する所ならんと思ふとなるべし。然れども、實際につゐて細かに之を考ふれば、必ずしも然らず、我等の宗教は美はしき言を以て組織せらゝものの存外に多く、所謂基督教徒の敬虔なるものも、教會の通語に過ぎざるもの尠からず。その裏面には何の事實もなき宗教上の文字と見ゆるもの一にして、足らざるなり。

又或基督教徒は初めて信仰の道に入りし時に比ぶれば、安心、喜樂など云へる基督教徒の有すべき經驗に遠かると、今は更に甚だしきが如くに感ずるなり。彼等は豫て思ひ立ちしが如くには信仰も進まず、喜ひも得られず、經驗上の宗教、少しも振ひ起らざるが如き心地す。然れども敢て宗教に入りたるとを悔ゆるにあなず、只自らの經驗熟せざるに失望するのみ。時としては、此世ならぬ神聖なる音樂聞らずも心に感じて喜ぶとあれど是等の經驗をなすは、希有のとにて、常に續くものにあらざるなり。彼等は眞に安きを得たりと覺ゑざるなり。その安心喜樂は、不意に

起り、また不意に去る再び之れを欲すれども、その道を知らざるなり。斯くの如くなれば宗教は、堅固なる基礎なきなり。その様恰かも殘燈の明滅に等しく甚だ頼み少きものなりといふべし。基督教は慰めを與へ、世に喜びを充たすべきものなれど、斯くの如き有様にては實際上その經驗迹方もなき姿にて、安心の道甚だ危し。是れ健康の何者たるを詳かに知り居れど之を得るの道に至りては少しも理會する所なきに異ならず。

何故に斯くの如き有様に陷りたりやといふに、人の熱心足らざるが爲めにもあらざるべし。實際を見よ、基督教徒は經驗を積み、善き方に移らんとて非常に自らを疲れしむるにあらずや靈なる希望は、世界に充滿せり。思ひ掛けざる男女にして、安心を求むるもの勝て數ふべからず。智者、達者、若きも、華美なるも、また時として此の希望に襲はれざるを得ず。此の一事まことに人生の驚くべく、感ずべき事實なり。されば、人は熱に事欠けるにあらず、その求むる所い、光の更に輝かんとなり。人の要するは力にあらず、只已に具へり居る力を賢く運轉すべき方針を示さるゝを待つのみ。

是等の事につき教を求むれば先づ祈れよと云いるゝは通常の事なり、されどこは效驗の著しかるべき勸告にあらざるべし。安心喜樂を祈るのみにては、之を得んと甚だ覺束なし。素とより祈らずして之を得るものあるとなし、されど只祈るのみにて、之を得ざるも疑ふべからざる事實なり。我等は祈れり。眞實に是等の經驗を得んとて祈れり。果して之によりて安心喜樂を得しや。余は敢て祈りの效驗を制限せず、況んや神の惠みに於てをや。その作用は、必ず我等の意外に出づるとあるならん。只祈るのみにて、安心喜樂を得しものあらば、是れまた可なりと云はんのみ。余は斯くの如くして安心に至り得ざる人、即ち通常一般の人に向つて意見を述べつゝあるのみ。されど祈りて安心を得ざればとて、祈りを

無用なりとは斷言すべからず。只此の一つの目的を達するか爲めには不適當なりとすべきのみ。祈りを以てすべての靈魂病の万能藥となすは、只一種の藥を肉体のあらゆる病氣に用ゐんとするに異ならず。後者は賣藥屋なり、前者は已れの職務を知らざる靈魂上の教師なり。共に甚だしき過失に陷りたるものと云はざるべからず。

祈るの外、何事をもせざるは祈りの本意に背き、之を害すると甚たしとす。斯くの如き人は、只肺の臓のみによりて生きんと試み、專ら空氣をのみ呼吸して他の滋養になる食物を棄てゝ顧みざるに譬ふべし。肺の臓はなくてかなはぬものなり。空氣もなくてかなはぬものなり。されど身体には四肢百体ありて、れの〳〵其の目的を異にし、互ひに相異なりたる物を分泌收入し、各自の官能に相應する滋養の方法あり。然るを只空氣と肺の臓のみに依頼するか如きは大いなる僻事にあらずや。祈禱は基督教徒の生活に一つゝ特質を與ふる貴きとなれど、只之れをのみ專らにするは非なり。あらゆる目的の爲めに之を用ひんと欲するものは此の貴き祈禱を害するものなり。或事柄に對しては祈禱も不適當なりとするは決して之を輕蔑するとにあらず却て之を貴がらしむるとなり。祈禱の地位を卑しからしむるは效驗なき祈禱なり。人〻〳〵祈禱のみに依頼し、之れによりて安心立命を得んと欲して熱心に祈り、祈りて之を得ざる時は、遂に祈禱を放擲するに至る。無神説にして此の原因より生ずるもの尠からず、只議論上の無神説のみならず尤も恐るべきい基督教徒の無神説なり、彼等ゝ知らずして實際上の無神説に陷れり彼等ゝ力を極めて已れの無神徒にあらざるを辨ずるなり。然れども、其の實際ゝ祈禱にも神の力にも充分に信を置かざるものとなりたり。これ多くゝ祈禱を以て万能藥と誤解し、實際に於て其の然らざるに失望したるより生ずる結果なりとす。蓋し適當なる條件を滿足する祈りゝ能はざる所なしといへども、旨目なる祈禱は然らず、旨目なる祈禱ゝ、迷信

なり。眞正なる祈禱い、人信仰によりて祈り、神規律によりて働くと云へる確信を含むものなり。余い次第を追ふて此の道理を説明すべし。

此の宗教上の不都合を匡正するの道如何。安心立命の秘密い何處にありや天才を有するにあらざれバ之を發明し難しとせんか。何ぞ夫れ然らん。宗教い万民の受くべき幸福なり。安心を得るの道い、すべての人の通行するを得べきものたらざるべからず、余い今、人の熟知せる道によりて安心の門に進まんとす。されど宗教界に於てい、此の道を通行するもの少きが故に余ば讀者の忍耐を乞ひ求めて此の明々白々なる通常の路につきて暫らくの問述ぶる所あらんとす。

結果は原因を要す

世の中の出來事、一つとして奇偶に出づるものなし。神の働きはみな秩序に基けり。万事一定の規則に基きて排置せられ、大小となく偶然なるものあらざるなり。宗教のといへども亦法則によりて支配せられ、品性も法則に支配せられ、幸福も法則に支配せらる。基督教徒の經驗實歴にも自ら一定の法則あるなり。人其の理を忘るゝにより安心、喜樂、平和信仰などが雪若しくは雨の如く天より心に降り來らんとを望む。されど此等は決して斯くの如くに落ち來るものにあらず万一斯の如くに落ち來ることありとするも、其の起源に溯れば、これより以前に種々の手續を經、また等しく自然の法則に支配せらるゝものなるを見ん。雨若しくは雪の如きは、空中より落ち來るなれど之れにい一方ならざる來歴ありて存す。これ實に既往の原因より起り來りし成熟せる結果なればなり。安心、平和、喜樂も亦然り。必ず之れを生ずべき條件を充さざれバ、生ずるものにあらず、春風、暴雨皆共に偶然にあらず、必ず之れに先だつ條件あるを要す。安心、平和い人の内心に露るゝ、春風、晴天の如きものにて、亦種々の條件を經過するにあらざれバ、生ずるものにあらざるなり。能く思ひ見よ、此の世界は犯すべからざる秩序に基つけるものなり。若

し味美き食物を調理せんと欲すれば、家婦先づ方式の如く之を塩梅せざるべからず、適當なる調理の條件を盡したる後、美味の生ぜざるを欲するとも得べからず。こゝに料理をするものゝ家婦の力にあらず、其實自然之れを調理するなり、彼れゝ只種々の物品を集め、原因をして運動せしむるに過ぎず、而して此等原因ゝ自然其の期するが如き結果を生せるなり。家婦ゝ造物者にあらず、只其の媒介となりたるのみ、彼れゝ偶然に結果を求めざるなり。基督教徒の宗教に於ける、何ぞ之れと異なるものあらん。一種の條件に應じ、其の手續を履むときは、一種の結果自ら生ず。此の結果は條件なくして起るものにあらず、此理實に明白なりとす。」

余が望む所ゝ讀者が此の簡單なる因果の法則、靈界に行はれつゝあるを悟るに至らんとなり、余は他の事ゝ暫らく措きて、先づ安心の一事に就きて之を論せんと欲す。安心の事、已に明かならば、此の一理、之を万事に適用すべきなり

亞弗利加の探撿者は、一種の熱病に罹るの患あるを免れず、之れが爲めに心狂へるが如く胸中全く平和なきに至る。此の心に平和なきてふ結果は一つの特種なる原因より發出したるものなれば、之を免かれんと欲するものゝ、第一に其の原因を除かさるべからず。其の原因の除かれざる間は醫師の苦心は何の功をも奏するとあらざるべし。亞弗利加の內地に熱病と稱する肉体の經驗を生起する原因をなすなり。而して此の熱病ゝ、人をして精神落ち付かず、心狂へるが如くならしむ。此の心の經驗を除かんとすれば、肉体の經驗を除かざるべからず。肉体の經驗を除くべき唯一の方法ゝ亞弗利加を亡すか、若しくは彼處に往くとなきにあり。基督教徒の所謂安心を得るの道亦た然り、吾人が此の世にありて、心常に騷ぎ胸中寧靜平和の時少きものゝ、之れに添ふ所の原因あればなり、此の原因を除くは、安心立命を得るの唯一手段なりとす。

安心には必ず其の原因あり、肉体の休息も、道徳上及び靈魂上の休息も

皆、特別なる原因を有するものなり、若し平和安心てふ結果を得んと思はゞ、之れに聯帶する原因を働かしめざるべからず原因によらずして結果を得んと期するは設使ひ祈禱、讃美の如き宗教的の手續を盡したればとて寔に愚かなる行ひなりといはざるを得ず。耶蘇曰く、人誰か荊蒺を荆棘より、無花果を薊より蒐むるものならんやと。これ斯くの如き安信を一擊の下に打破したるものといふべし。

基督教何故に安心の道を詳かに說かざりしや。何故に今日の基督教徒をして、之れを得るの道に惑いしむるやと難ずるものあらば、余は之れに答て云いんとす、基督實に之を教へたるなり。彼れは明白なる詞を以て之を說き、基督教徒の安心を生するの原因を示したり。我等い幼なきときより其の詞を熟知せり。曰く、我れに來れ、我れ爾曹に平安を與へんと。此の一言を見れば、安心は一つの賜物にして、基督に屬くものい容易に之れを得べきが如く見ゆれども、其の下の文を見れば、之れには亦た特種なる條件の添ふものあるを知るべし。蓋し何人といへども、自由自在に安心を分ち與ふること能はざるべし。こは笑を與ふること能はざるに同し。我等い人をして笑いしむるを得。然れども、物品の如く之れを與へ、若しくは奪ふこと能はざるなり。人に喜びを與へんと欲する時い愉快を生ずべき種々の條件を排置して、その自然の作用に任せざるを得ず。勿論大人物に近づくものは、自ら其の感化を受けて平和と信任とを生ずることあるなり。新くの如き場合に於ていい恰も暴風烈日を岩蔭に避くるが如き心地す。人間の偉人物すら斯くの如き感化あり、況んや世間の大救主たる基督をや。されど基督が我等に安心を與へんと云へる時い決して此の事を示さんとしたるにはあらざるべし。彼い人をして平和安心を得るの道に就かしめんと云ひしに過ぎず。基督い物品を與ふるが如く安心を人に交付することい能はず。只之れを得るに必要なる條件を示せるのみ。蓋し安心を物品の如くにして與ふるは基督の本

意にあらず、又斯くの如くして平和を得るも、人の眞正なる利益に非ず人自ら其の手續を經過し、其の條件に應じて之れを得るは尤も美しきことなり

されば基督は吾れに學べ、爾曹平安を得んとは宜へるなり。之れを再言すれば安心は與へらるべきものにあらず、得らるべきものなり。安心は突如として生ずるものにあらず、其の手續を經て來るものなり。安心は道に遺ちたる寶を拾ふが如くして得らるゝものにあらず學者が知識を修むると如くして得らるゝものなり。安心は美はしき菓物の如く特種なる氣候地味に生じて之と異なれる氣候及び地味には生ずることを能はざるなり。安心はすべて事物の生長するが如く、秩序ある發育を經て生じ着實なる手續によりて熟するものなり

基督が學びて安きを得よと敎へたるは、明かに此の安心の道を解釋したるものなり。曰く、我れに學べさらば汝の靈魂に休息を與ふることを得んと、學ぶとと、安きとの間に相關の法則を立てたるは蓋し基督を以て破天荒とす、學んで安きを得るとは我等の夢にも思はざる所なり。何を學ばゞ以て心に安きを得べきか、基督は猶豫なく之に答へて二箇條の事を擧げたり。溫柔と謙遜即ち是なり。曰く、我れに學べ、我れは心柔和にして、謙れるものなりと。人の安心は、全く此の二の事による是れ恰も安心の原因ともいふべきものにて、之を心に養ふ時は、平和直ちに生ず。何故に斯くの如き關係あるやといふに、是れ決して偶然のとにあらず。其の關係實に事物の自然に基づきて頗る道理あるとなり。何をか其の關係といふや、余は他の問を以て之れに答へんと欲す。人の心に平和を與へざる原因の重なるものゝ何ぞや。已れを知り、人を知るものは、こは傲慢なり、利己心なり、名譽心なりと答ふるならん、汝が已往の歲月を顧みよ、其の不幸ゝ主として一身上の耻辱、及び數にも足らざる程の失望より生じたるものなり、大難は屢々來らず。而して其の來るとは、我等精

神を振て之れに當ると、必ずしもなし難きに非らず。日々人と接するより起る所の瑣々たる軋轢、營業若しくは事務の煩雜、家庭の不折合、功名心の失敗、不如意、及び失意等の如きは、内心の平和を破壞するものなり。されば傷つけられたる虚榮の心、失意せる希望、滿足するとを得ざる利己心、是等は人の心安からざる普通の原因にして、今に初まりたるとにあらず。斯くの如きが故に、基督が其の反對なる二事を擧げて、安心の道を示せると其の故ありと云はざるべからず。柔和にして心謙れるものには、是等の失意煩悶なし。斯くて安からざらんと欲するも得べからざるなり。此の治療法は、根蔕を衝くものなり。己れを中心とする生活の問斷なき苦勞は柔和と心の謙遜とを學ぶに於て直ちに之れを取り除くとを得べし。熱病は全く健かなる体を襲ふと能はず。不安心の熱病は、基督の道を學び、其の空氣を呼吸する所の靈魂を援すと能はざるなり。人は彼等が飛び去りて平和に就かんが爲に、鴉の翼を得んとを欲して嘆息す。されど飛び去ると我等に何の利益をも與ふべからず。我等は只頂上を望みて平和を得んと欲す。而して其の底にあるを知らざるなり。水は其の最も低き處に就かざれば休まず。人も亦然り。故に謙るべきなり。己れの事に付き毀譽に關する傲慢の心なきものは、人己れを知らざれバとて、心を傷むるとなかるべし。故に柔和ならんこそ肝要なれ。待つ所なきものは其の來らざるを以て、憂慮するとなし、是れ明白なるとにあらずや。謙れる人、柔和なる人は、實に他の人の上に出で、万物の上に超絶す。彼等は世に思ひ煩はされざるが故に、世界を統御す。守錢奴は金を所有せず。却て黄金に所有せらる。されど柔和なるものは實に之を所有するなり。基督曰く、柔和なるものは地を嗣がんと、彼等ハ之れを賈はず。之を侵略せず、只之れを受け嗣ぐなり。

世には常に人の輕蔑を受くるが如く感ド、何れの處にありても、己れを疎略にする事物を發見する輩なきにあらず。彼等は非常に不幸なり。何

となれば、輕蔑は世界に滿つ。殊に已れの想像より生ずる輕蔑へ到る處に滿ち塞がれり。斯る人は清貧の人と同ドく甚だ憐れむべきものなり。彼等は道德上の文盲にて、眞正の敎育を受けしものにあらず。何となれば未だ如何に生活すべきや、その道を學びしとなければなり。生活の道を知るもの天下に稀なり。我等は單に動物たるの方法及び志を幼時より傳へ來り、漫然生長して世の中に出てたり。而して今日までの習慣、意向毫も改むべき必用あるを知らず、生命へ美術の粹にして、生涯の忍耐を以て聽かざるべからざると、我等が世にあるの歲月は、之れを全ふするに足らざるとなるを悟らざるなり。

基督敎は此の生命の美術を人に敎へんとするものなり。其の敎訓及び課目は我れに學べの一言にあり。只此の敎育は、書籍講談、信條若しくは敎理に就て之を受くると能はず。其の學問は生命にあり、我等は基督と共に住みて其美術を學ぶと恰も古の師弟の道に於けるが如くならざるべからず。

さて疲れたるもの、及び重きを負るものに對して基督の發したる招きは、新しき主義即ち基督の主意に基づきて更に生活を初めよとの勸告たるに過ぎず。其言に曰く、我が事物に處するの道を熟視せよ、我れに習へ、我が如くに生命を處すべし柔和にして心謙るを勉めよ。汝等平和を得ん。

余い基督敎徒の生活は、何人にも花の寢床に臥すが如く、常に樂しきものなりといはず。凡そ敎育の道は斯くの如くなることを得ざるなり。基督の學べと云へる一言は、如何ばかりの意義を含めるや。之れを知るものは輕々しく無責任なる心を以て基督の學校に入ることをせざるべし。何となれば、此の學校にて學ぶへきと、多きのみならず、亦忘るへきと、少からず。多くの人い、其の心已ふ半ば頽破去て習性となりある頃に至り、遽しく、此の學校に入らんとす。五十歲にして算術を學ぶと難し、基督敎

を學ぶとは更に難しとす。少年の時に此教育を受けしとなきものが俄に柔和謙遜の道を學ばんとするには、彼が世の中にて珍重するものゝ半を棄つるとを要するやも圖られず。例へば謙遜を學ぶの道は、屈辱を忍ぶにあり、之れを學ぶに他の學校にあるべしとも覺ゆ。斯くの如き學校に入りて、其の生徒とならんと、實に容易にあらず休息あるに相違なけれども勞も亦甚だしと云はざるべからず。

余が說き明さんとする問題は、愉快なる事なれど猥りに十字架を看過し、之を得んとするより生ずる損害を忘るゝは、宜しからず。蓋し勞苦は心の發育と關係するものあるに至りて初めて其の價値あるを知るべし。世人云く艱難は我等に益をなすとならんと。然れども、如何にして益ありやと問へば、其の思想漠然として、疑似の間に出入するが如し。思ふに此の事は、原因結果の法則によりて必然生ずべき道理なり、例へば身代を失ふより生ずる第一の結果は、屈辱の念なり。而して此の屈辱より生ずるものは謙遜の念なり。已に謙遜なり、故に此に平和の念を生ず。これは安心を生ずるの道として、迂遠なるに似たり。されど造化は常に、迂廻の手續を以て、事をなすものなり。他に謙遜となり、若しくは平和を得るの道ありや、否や覺束なきとなり。人若し何時にても、物を誂へるが如くして容易に自らを謙遜になすとを得ば、便利此上なし。見ゆれども、如何にせん斯くの如きは、實際に於て經驗せざる所なり。我等は皆此の窄き門より入らざるべからず。劣等なる己れに對して死するは、高等なる生命に達する最近の門にして、又最も迅速なる道なり。

然れども、これは只眞理の一半なるのみ。基督の生命は、その外部より見れば、其類を見ざるほどに騷擾煩雜を極めたるものなり。暴風怒濤は彼が其体を墓に入れらるゝまで、常に其の周圍に集まれり。されど內部の生活は、水晶の海の如く曾て一回も其平和を失ひしとなし。如何なる時にても、墓所に行くば、平和の存するを見出せゝならん、その生命を付け

晩ふもの、エルサレムの街衢に徘徊し、殺氣身邊に充滿せしときも、尚ほ主は門徒に向ひ最後の遺物として所謂『我平和』を與へたり。如何なる事物にても地に於ける基督の生命の平穏を破りしとなし。不幸も之れに達すると能はず。彼れには仕合せの善惡といふ者なかりしなり。食物衣服、金銀、即ち世の煩ひの半ばを生ずるものは彼れが心を勞せしところにあらず。之れが爲めに思ひ煩ふ所なし。其の名譽を毀けて、之を苦しめんとする、到底其の功力なかりしなり基督い已に自らを『聞えなき』ものとなし、侮辱の前に口を噤みたり。人に罵ちるゝときは罵りを以て之れに應せず、世の中にその心の表面を騒がすべきものなかりしなり。

心の安きといふとは、如何なる義なるや。基督の心を見るに至りて、初めて之を理會すべきなり。眞正の安心は感情にもあらず、又感情の動かざるにもあらず、會堂に於て、我等の感ずるが如き殊勝なる感ドにあらず、說敎者がその一種の聲の中に有する所の者にもあらず、自然の美、詩の妙巧みなる音樂の如きは、心を慰ひるの力なきにあらねど、其の與ふる感情を以て眞の安心とはいひ難し。眞正の安心は、靈魂が全く平均を得て、內部の人、すべて外物の刺激に對して調和せざる所ろなく、奪ふべからざるの覺悟、動かすべからざるの信仰、深く神に根ざせる心を以て、あらゆる事に應ずるの用意、到らざる所なきをいふなり。ブラウニングが神はその天にあり、世界はすべて善しと云ひし如き心を抱くものは、安きを得たるものなり。

二人の畫工、安心休息の意を示さんが爲めに畫を作りしが、甲い、遠き山間にありて靜かに寂しき湖水の景色を取りて其意を寓せんと試みたり。乙は、音凄ドき瀧に危ふくも差し出でたる小枝の上に、駒鳥の巢を作れる圖を選みたり。甲の畫は停滯なり。乙のは休息なり。蓋し休息には二の分子あり、靜かなると、活動と是れなり。勇氣と恐怖、作ると亡ずと、靜かなると騒がしき是れなり。基督の安きは實に斯くの如きものにてあり

しなり。基督は其口に言ひしことは、すべて身に實行するの道を知りたり。基督は世を經過するの道を熟知したり。此を以て生命に關するその意中を他人に傳へんとを深く願へり。彼れは眞正の生命を與へんが爲めに世に來れるなり、こは自ら之れを有するが故に、あらゆる人類に與へんと云たるものなり。故に疲れたるもの重きを負へるものに向ひて皆之れにつきて生命の秘密を敎へられんとを勸告したるなり

軛は何の爲なるや

尙ほ一つの疑ひあり、基督は我れに習へと仰せられし後、我軛を負へと宜ふ、重荷を與へつゝ平和を與へんと云はるゝは、何故ぞ。基督敎徒の生活は、其反對者が唱ふる如く、人生に更らに重荷を加ふるものなるや浮世の苦勞は、さなきだに堪へ難きほどなるを、なほ究屈なる誡を以て、之を惱ましんとするは、甚だ謂はれなきとなり、我等最早軛に要なきなり是れ全く基督の言を誤解したるものなり、何故に斯くの如く明白なる意味を取り違ふるに至りしを怪むべきとなり。軛は何の爲に用ゐらるゝ者ぞ、之を負ふ獸の重荷となるべきものなるや、極めて然らず。荷を輕くせんが爲のみ。軛を用ゐすして牛に田を鋤かしむれば、其勞堪へ難きとならん。軛あるが故に其勞を感ずること輕きなり。見るべし軛は困苦の機械にあらずして、憐愍の機械なり。仕事を難からしむる爲に設けられたる惡しき工夫にあらずして、堪へ難き勞動を堪へ易からしむる工夫なり。然るに基督の軛に至りては、却て辛きものゝ如く考ふるは、大なる誤りなり。基督敎に贊成するものも此句を誤解して何事も多少の苦しみを嘗めざれば成就するものにあらず、天國に至るにも基督の軛を負ふの必要あり、後の樂みに比ぶれば、其の苦しみは言ふに足らずと說き勸むるなり斯く贊成家も、反對者も同じく之れを誤解するが故に、人をして神の國に遠ざからしめたるの例、尠からざるべし。斯くの如く見る時は、基督は好んで近よるべきものにあらず、恰かも一の督促者の如く

細かなる規則を以て生命の區域を狹め、無用なる十字架を負はしめ、悲しみを以て德となし、幸福を以て罪となすものなり。斯くの如き有樣にては、基督敎徒ほど不幸なるものはなかるべし。彼等の生涯は、苦行の生涯なり。彼等い此世に於て種々の辛き目に遇ひて漸く來世の望みを買ふとを得るのみ。其の不幸又憐れむに堪へたり

おは軛を執るなる語を誤りたるより生ずる間違なり。基督の譬喩に用ゐたる軛は、懲役人抔の罰せらるゝ時負はしめらるゝ類にあらず。農夫の牛馬に負はする簡單なる頸輪の類なり。基督が曾て其のナザレの工場に於て手づから作りたるが如き木の輪を指せしものならん。基督は滑かに工合善き頸輪と粗くして工合惡しきものとの區別を熟知せり。我軛は易しと云へるは、即ち之を譬となしたるものなり。

さて茲に言ふ重荷とは何ぞや、おは基督敎徒にのみ負せらるゝ特種なる重荷をいふにあらず。世間普通の重荷なり。此の重荷は人生をさしたるものにて、我等が生るゝより死ぬるまで、常に負はざるを得ざる浮世普通の重荷なり。基督い人の皆之れに惱むを見たり。或人は之れに倦む、或人は失敗の爲めに慨き、或人い之を悲劇の如くに感ず、何人も之を悶動き苦しむ處となせり。如何にして此の生命の重荷を負ひ易からしむべきか。是れ全世界の大問題なり。古へも今も、之を問ふて止まず。基督は之に答へて云へり、我が如くに之を擔へ、我が如くに生命を負へ、我が見る如く世を見よ、我が主義によりて之を解釋せよ、我が軛を負ひて我れに學べ、必ず容易からん、何となれば、我軛は易く、其の肩に箝る工合誠に善く、汝の荷輕きを覺へんと。

宗敎は人をして荷を負ふの必要なからしむるといふ如き敎は、少しも此言の中に見へざるなり。重荷を負ふの必要なからしむるは、生きるとなからしむるに同じ。基督敎は、此の重荷を負ひ易からしむるを目的とす。基督の敎は尤も善く、又尤も幸ひに生くる道を敎へたるなり。人が世

の業を勉め、その重きを負はんとするを見るに、馬具の工合甚だ拙悪にして、自然に背けると少からず。彼等の馬具は、流行後れのものなり。その粗悪なるその工合の宜しからざるが爲め、とても長くは、耐へ難き有様なり。

是れ即ち疳癪と稱して其の名い扑訥に似たれども、其實は苦界の苦心の一大原因となるべき病ひの起點なり。疳癪慢性となる時い、精心怏々たり。是れ即ち極めて鋭敏となりたる利己心なり、甚だ感動し易き妄念なり。其の療法は軛を他處に移すにあり、人及び物をして我等の性質中の新しき部分、即ち從來恐らくは用ゐしとなき部分に觸れしむるにあり、從來の感覺は、之を用ゐずして遲鈍となし、而して其の心を柔和に且つ謙遜ならしむるにあり。夫れ世界何れの處に至るも、堪へ得るものに苦界の苦を負はせ、人をして苦界の苦に接近せしむるは、基督教の一美事なり。基督教は病を全治すべき不可思議力を有す、基督教は人生を傷つくることなくして人生の方針を正し我が周圍の万物と相調和せしめ、世の疲勞と塵垢に惱めるものをして、新なる恵みに至らしむ。人生の觀を改め、物の性質を變へて人の苦心を輕くするは又是れ基督教の本務なり。夫れ物の重量は地球の引力に由る、今若し地球の引力を取り去りたりとせん乎、地球よりも引力の少き星界の一噸は、半噸の量だもなきとなるべし。基督教は地球の引力を取り去るものなり。是れ即ち人の勞苦を減ずるの一法なり。基督教は人をして他世界の國民たらしむ。昨日一噸の量ありしもの、今日は半噸だもなし。故に基督教は人の境遇を變ずるとなきも、只其の地平線を擴げ、其標準を變へたるのみにて能く世の全局面を變ずるなり。

基督教は基督を教へ玉ひし如く、無比眞正の處世哲學なり。されど我等が所謂基督教とは、其意基督の基督教を指す。他人の飜案せしものは、ポシチ繪なり法螺なり、誤解なり、近視なり、皮相なり。其の多くは、發達の望

みなく、却て傷まーき結果あり。余は何人が如何なる涙の谷を通過ーたるか又通過せんとするかを氣遣ふものにあらず、すべて此道を過ぐるものは、卽ち新ーき生命を得べきなり。

結果は如何に生長するの

若ー余の論題をーて安心ならーめば、尙ほいふべきと多くてれあり、又論ずべき安心の種類多くてれあるなり。されど余の論題ハ安心にあらず、基督敎徒の經驗は妖魔師の行爲にあらで、原因結果の法則の下にあるとをいふにあり。余は只此の道理の作用を說明せんが爲めに安心を例とーたるのみ。時間もあらば余は順次にあらゆる基督敎徒の經驗を述べ、一箇の法則能く万事を掩ふとを示すべー。されど是れより以上の研究は、全く諸君に委ねなば却て有益のとをなー得べーと考ふ。そは果ーて何ものぞや余ハ諸君がこれよりも一層充分なる結果を見、一層神の途に近づき、一層其の基督敎的生活を堅確鞏固ならーむべき聖書研究法あるを知らず、余は今本論を終るに臨みて一言之れが說明をなすべきなり。

喜びは何れより來るや。余の知れる一日曜學校生徒は謂へらく喜とは一の塊團より成り天の或處に貯藏せるものなり、人若し之を得んとて祈りすれバ、その碎片奇ーき樣にて天降り、其の靈魂に入るなりと。余は此の生徒より賢ーかるべき人にーて尙ほ斯る茫漠たる物質的の見解を抱くとなきを保せず。實に喜びなるものは、苦痛と等しく是れ亦原因結果の事物なり。何人も只之れを得させよと願ひーのみにては、受くる能はず。こは基督敎的生活の一熟菓にーて、すべての樹菓の如く生長せざるべからざるものなり。印度にマンゴー(木の名)手品と稱する一つの手品あり、地を堀りて種を播き土を以て之を掩ひ種々の呪文を唱ふれバ、五分時の間に生々たるマンゴー樹の芽生ず、余未だ此の技藝を見ー人に遇ハず。されど又こは一の魔術にはあらずと確信せる人にも遇は

ず。万有の秩序を信ずるとは、世人の一致する所されど樹菓は如何にして生ずるかは何人も之を知らず、只人々等しく承知せる所にて、一時に成長すべきものならずといふと是れなり。或は生涯の間一たびも喜びの種子を播かざる人あり、或は一二の芽を植ゑながら、之を成長も出來ぬ日影に置く人あり。

然らば喜びは何れより來るや。基督は此の問題に付て教訓を垂れ玉ふに極めて巧みなる譬喩を以てし玉へり。余は此の場合には、何時も安心を論ずる時と等しく主の教訓を引照す、はは余が自己の説を吐くものと誤解せらるゝを欲せざればなり。而して主は無比完全の言を以て之れを説明し給へり。

今茲に全体の説明を掲ぐるの要なし、その説明とは葡萄樹の譬喩これなり。讀者は基督が此の譬喩を陳べ玉ひし所以に思ひ至りしとあるか。ては單に一般の道理の好説明なりとて之を投げ出し給へるにあらず、又單に不可思議の一致を説明し、基督我等の内に住み玉ふことを論ずるにもあらず、その意も勿論なきにあらねど尚ほ他に深き意味あるなり。基督之を述べ給ひたる後ち、其の一大教訓を授け、餘り非凡にもあらざるとをなせり。即ち弟子を顧みて、之を述べたる所以を告げ給へり。こは即ち喜びを得べきの方法にてありつるなり。其の語に云く『我れ是のことを爾曹に語るは我が喜びの爾曹にありて爾曹の喜びを盈しめんが爲めなり』と是れ即ち幸福の秘訣なり。

此の句の意味を反覆して考ふる時は、此の結果の原因を發見すべし、即ち眞の幸福を逃らする只一の泉を發見すべし。余今具さに之を説明するにあらず、只諸君に此語を熟思せられんことを乞ふのみ。第一に葡萄は喜を代表する東洋的の記章たる』とを記せよ。其の菓は人の心をして喜ばしむるものなり。而して此の葡萄より搾りたる汁は、通常農夫等の食膳に上るものなるが故に、其の喜びや清淨のものなれども、亦是れ墓な

き取り止めもなきとなり。こゝ誠の幸福にはあらず、又パレステナ葡萄園の葡萄ゝ眞の葡萄にはあらず、基督獨り『眞の葡萄』なり。然らば即ち喜びの源泉も亦此にあり。其の流れ出づべき溝路は何物たるにもせよ、すべて眞の喜樂は其の源基督にあり。斯く云ひたりとて、現實の喜樂、基督より我等に傳ゝり、或物体彼れより我等に移轉すとの意にはあらず。彼れより我等に傳ゝるは即ち之を得るの方法なり。此の中には、他人と偕に喜び、他人と偕に悲しむの意味もあれど、こゝ又別事なり。基督ゝ『安心』の源泉なるが故に又喜樂の源泉なり、基督の民は基督と其の生活を偕にし、其の結果を偕にす、此の中の一つは即ち喜樂なり。基督の生活する方法は物の性質ふ於て喜びを生ぜしむるものなり、基督が『我が喜の爾曹にありて』云々と宣ふや、其の意一つは之を生ずべき原因の何時までも運動すべしといふにあり。其の門徒たるものは、其の生活を踏襲反覆して自ら其の生活の附屬物を獲得すべし。さらば基督の喜び、基督の喜びに伴へるものすべて我等の中にあるべきなり。

次に此の喜びの來るべき溝路を説明せし句あり、云く『人若し我に居われ亦かれに居ば多くの菓を結ぶべし』と。結菓は第一にして、喜びは第二なり。結果は喜の原因又溝路なり。結果ゝ必然的の先驅にして、喜びゝ即ち必然的の後從又附屬物なり。こは一は結べる菓によるとなれども、又其の菓を結ばしむるに至りたる助緣にもよるとなり。即ち喜びなるものは一ゝ、平和、避難所、仁愛の類擧つて之を蓄へたる基督の前に常に在ることにより、又一は心情、品性、意思の上に及ぼす生命(即ち基督)の感化により、一は自らの利を棄て、他人の益を圖らんとするより來るすべての德を具へたる他愛的慈善の行爲を奬勵する力にもよるとなり。是等諸種のものは之を種々に行ひ、時々に施して能く潔白なる幸福の原因たるべし。其の中尤も簡單なる他人の爲めに善をなすが如きとといへども、其の效甚神妙なり。されど如何なる幸福といへども、是れに秘義と稱

するものにあらず。適法の分子、整頓するときは、得ざらんとするも得べからざるなり。基督に居るものは、即ち多くの菓を結ぶを得、然らば即ち幸福を得るに誤らざる途は、善をなすにあり、善をなすに誤らざる途い基督に居るに在り。之れ皆原因結果てふ明白の事實にして、人々思ふが儘に種々の策を盡くして幸福の發見に從事し、未だ一人も其の目的を遂げざりしとそ其の確証なれ。當然の結果を得るといふは、當然の原因ある時のみに限るとと知るべし。

然らば即ち我主は葡萄を作るといふと同意味に於て此の基督教的經驗を作爲しつゝあるや如何。夫れすべての菓は、其の地に生ずると靈魂に生ずるとの別なく、其の野生葡萄たると眞の葡萄たるに論なく皆生長するものなり。然れども、人の之を生長せしむるにいあらず。人は只其の境遇を整へ其の條件を全からしめて以て生長するを得せしむるのみ。而して之を生長せしむるは即ち神の聖業なり。原因と結果とは世界の憲法に欽定せられたる永遠の箇條にして人之を動ずと能はず。只人の力の能くし得べきは、自己を此の理法の接續中ふ置くとあるのみ。斯くて人は能く物の生長を助くべく、己れも生長するを得べし。然れども生長せしむるものは、即ち神の靈是れなり。

余は更に一言すべきものあり、そは實驗によりて此の法則を試むると是れなり。人々よ、自ら物を生長せしむるの方法を知るが故に之を生長せしめ得たりと自負する勿れ。料理指南書に就て割烹を學べ。諸君若し此の簡明平易の方法を實施する時は曾て誤まるとなきを余は保証せんと欲す。諸君よ結果の少かりしを嘆息せし時間を以て之が生長を助くべき條件を整ふるに用ゐよ。然らば菓自ら結ぶべく、又結ばざるべからざるなり。以上我等は結果といふとに付き詳論する所ありき即ち只經驗のとのみを陳述したりき。我等い之れを記し、之れを稱揚し、之れを勸說し之が爲めに祈禱し、力の及ぶ丈けは、總てのとをなし了へしが、只

一つ結果は何物に原因するかを論ド遺せり。依て之れより原因を調査せんとすロッチエ云へるとなり、物の發生存在すといふは、即ち關係するとなりと。凡そ基督教徒たるの生活をなす方法皆悉く百發百中なるにあらず、基督教徒たるの經驗をなすの方法、多くは『恐らくは』てう意味あり。されど其の方法にして若し天然に協ふ時は、成功せざらんとするも得べからず。宇宙の大法は其の保証人なり、宇宙の大法とは即ち活ける神の御手なり。

眞の葡萄

『我は眞の葡萄の樹我が父は農夫なり、我に在て凡て實を結ざる枝は父これを剪除すべて實をむすぶ枝は之を潔む蓋ます〳〵繁く實を結ばしめん爲なり、今なんぢら我言し言によりて潔なれり、爾曹われに居されば我また爾曹に居ん枝もし葡萄の樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能ず爾曹も我に連らざれば亦此の如ならん、我は葡萄樹なんぢらは其枝なり、人もし我に居われ亦かれに居ば多の實を結ぶべし、蓋もし爾曹われを離るゝ時は何事をも行能ざればなり、人もし我に居ざれば離たる枝の如く外に棄られて枯るなり、人これを集め火に投入て焚べし。爾曹もし我に居りまた我いひし言なんぢらに居ば凡て欲ふところ求に從ひて與らるべし。爾曹おほくの實を結ばゞ吾父これに因て榮をうく然ば爾曹わが弟子なり。父の我を愛し給ふ如く我なんぢらを愛す爾曹わが愛にをれ、若なんぢら我誡を守ば我愛に居ん、我わが父の誡を守て其愛に居が如し。我この事を爾曹に語るは、我が喜のなんぢらに在て爾曹の喜を盈しめんが爲なり』

明治二十五年四月十八日印刷
明治二十五年四月十九日出版

定價六錢

著者　福音新報社員

編輯兼發行者　東京麴町區三番町六十四番地　山内量平

發行所　東京麴町區三番町六十四番地　南海堂

賣捌所　東京京橋區出雲町一番地　警醒社書店
仝　東京京橋區築地二丁目二十二番地　一二三館

印刷所　東京麴町區三番町六十四番地　南海堂活版所

版權所有

明治二十五年四月十八日印刷
明治二十五年四月十九日出版

福音新報社員

（定價六錢）

編輯兼發行者　東京麹町區三番町六十四番地　山内量平
發行所　東京麹町區三番町六十四番地　南海堂
賣捌所　東京京橋區出雲町一番地　警醒社書店
仝　東京京橋區築地二丁目二十二番地　一二三館
印刷所　東京麹町區三番町六十四番地　南海堂活版所

版權所有

基督のすがた

植村正久、田中達合譯　紙數三百三十五頁、定價六十錢

右は蘇國の宣教師スタウカル氏のイマゴ、クリスチーを譯せるものにして基督の本体を或は教會より、或は家庭より、或は患難より、或は社會より、觀察し思想靈活、行文流暢能く基督の德を竭せり。願くは一書を座右に備へ、祈禱冥想の伴侶、人生の指南車となし給はんことを

發行所　東京麹町區三番町六十四番地　南海堂
發賣所　東京々橋區築地二丁目廿二番地　一二三館

小說　眞如の月

松琴居士著　紙數百三十頁　定價拾五錢　郵稅二錢

本書は曾て福音週報に掲載し未だ大團圓に至らずして同誌禁止の嚴命に接したれば殘念ながら遂に腹稿中に葬り去りしを此度補ひ足して出版したるものなり居士の筆力は同週報愛讀者の偏く知る所若し夫れ小說の結構に至りては御閲讀の上御高評あらんことを乞ふ

發行者　東京市麹町區三番町六十四番地　山内量平
發賣所　東京々橋區出雲町一番地　警醒社書店

福音新報

毎金曜日發行

社說　信仰上、神學上、社會上に關する新新有益なる論說を掲載○

論說　神學界の動靜に關する忠實なる報なり

說教　大家の說教を座ながら聞くの便利あるべー

教報　全國各地の教況藏めて此の一欄にあり

○其他家庭史傳雜錄外信等總べて靈魂の滋味なり○

福音新報定價表

	市内	郵税	市外	郵税	共
前金	一部三ヶ月分二錢五厘	無	三部三ヶ月分一錢五厘	三十八錢	三十八錢
税	十三部半ヶ年分六十錢	廿六錢	六部半ヶ年分六十錢	七十三錢	壹圓四十錢
五十二部一ヶ年分壹圓十四錢					

發行所　東京麹町區三番町六十四番地　福音新報社

信仰の標準

植村正久口譯

郵便切手七錢封入申込あれば無郵税にて遞送す

聖書の性質及び其の解釋法に付ては或を懷くもの少からず。今此の書は最も簡明に精確なる聖書論を記載したるものにて實に傳道者の指針、信徒の案内者として珍重すべき良著述なり。

發行所　東京麹町區三番町　南海堂

日本評論

（毎月一回廿五日發行）

日本評論は黨派の機關にもあらず、金錢の奴隸にもあらず、眞理を發揮するを以て其目的とし、正義を唱導するを以て其の任とす。世に媚ひ、時に投するは余輩の尤も拙とせる所なり。江湖の諸士願くは一讀せよ

日本評論定價表

	市内郵税無	市外郵税共
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	三十三錢	三十六錢
十二冊	六十四錢	七十錢

發行所　東京麹町區三番町六十四番地　日本評論社

亞古士丁

植村正久君序　田中達君撰　定價郵税共二十錢

古は平易なる文体を以て使徒パーロ以後の偉人たる聖アウガスチンの傳を叙したるものなりアウガスチンは異教の才子より一變して信仰の師父となり其の眞理の探究目熟心本り一轉を以て世の求道者に推薦すアウガスチンの母は貞淑敬虔比類稀なる巾幗にして家庭の操作摸範とすべきもの多き故を以て之を世の婦人社會に紹介すアウガスチンは神學上の知識該博にして創見多く信仰箇條の眞祖とも稱すべき聖書なりれを以て之を基督信者の全体に一讀を促す願くは續々購求あらんことを

批評

○女學雜誌○基督教新聞○國民の友○經濟雜誌○眞理○いのち○讃敵○國民新聞○聖書之友月報

發行所

東京麹町區三番町六十四番地　南海堂

七× 425

特29
768

020214-000-0

特29-768

安心立命

ヘンリー・ドラムモンド/著

M25

ABI-0013